
醍醐寺本閻魔天画像に関する一考察

京都・醍醐寺本閻魔天画像（以下、醍醐寺本）は、独尊で描かれる貴重な作例として知られている。とりわけ抑揚のある肥瘦線による輪郭と淡白な彩色で注目されてきたが、先行研究においては、平安時代後期、12世紀から13世紀にかけて制作年代の定説をみていない。また制作背景についても、三井寺系と醍醐寺系の二説が並んでいる。さらに造像目的については、閻魔天供の本尊として用いられたとする他、准胝法に伴う修法に用いられたとする説もある。それと関連して延命除災などの目的のために、祈禱本尊として急遽、制作されたという知見もあり検討すべき問題は多い。

そこで本発表では、制作年代について改めて検討しつつ、その造像背景及び目的について考察したい。

まず制作年代について、発表者は醍醐寺本を調査する機会を得、その精査に基づき、いくつかの点を明らかにすることができた。従来、肥瘦線と現状の彩色をいわゆる宋風と理解し、鎌倉時代に近づけて考える傾向にあったが、実見の結果、閻魔天の肉身部には輪郭を描き起こした朱線が残っており、この肥瘦線が下描きの墨線に過ぎないことが確認できた。また現状の淡白な彩色は剥落によるものであり、当初はより鮮やかに彩色されていたことと思われる。したがってこれらを根拠とした制作年代については、再考の余地があるのである。本発表では、積極的に院政期の仏画との比較を行い、描線以外の様式から制作年代の検討を試みる。例えば醍醐寺本の面貌や肢体の表現、描法は、平安時代の仏画から孤立するものではない。また光背や装身具の意匠や着衣の文様においても、12世紀前半の仏画に類例が見いだせることから、醍醐寺本の制作は12世紀前半に遡る可能性がある。

また制作目的について、閻魔天の修法例を参照すれば、醍醐寺三宝院における閻魔天供の本尊であった可能性を想定できる。その背景に関しては、醍醐寺本の図像が現図系胎蔵界曼荼羅中の閻魔天に典拠を求められること、東密系の事相書に説かれるものとその形像を同じくすることから、こうした文脈において位置づけを考えるべきであろう。

以上のように醍醐寺本の制作が、院政期、12世紀前半と想定でき、その背景及び目的に醍醐寺三宝院流における閻魔天供の本尊として制作された可能性を提示することは、閻魔天信仰に関する美術における醍醐寺本の意義や、醍醐寺に伝来する仏画における位置を明らかにすることとなる。